12 昭和57年(1982年)12月10日　教皇様の声　毎月10日発行　第32号
DECEMBER, 1982

教皇様の声

七つの秘跡（Ⅲ）

今回のヨハネ・パウロ二世教皇の英国及びウェールズ訪問の全般的テーマは、七つの秘跡でした。ロンドン・ウェストミンスター大聖堂では四人に洗礼を、そして、南ロンドン・サウスウォーク聖堂では病者の塗油を、コベントリーでは堅信を、マンチェスターでは十二人に叙階を、カーディフでは子供たちに初聖体をそれぞれ授けられ、リバプールとヨークでは、それぞれ告解と婚姻の秘跡について詳しく述べられました。

婚姻

結婚において男女は不解消の絆を結び、自己を捧げあうことを互いに誓います。愛の完全な結合です。その愛とは、過ぎゆく感情や時折の心酔ではなく、順境においても逆境においても唯一人の相手に完全に自己を結びつける責任ある自由な決意です。他者に自己を与えることです。全世界の人の前で宣言されるべき愛であり、全く無条件のものなのです。

このような愛を可能にするには、幼い頃から結婚に至るまでの慎重な準備が必要です。教会の揺るぎない支えと社会の絶え間ない支援がそれを育むのです。

神のご計画のもとで、夫婦の愛は自己を越え新しい命を生みだし、そこで家族が誕生します。家族は愛と生命の共同体です。そこで子供たちは大きく成長してゆくのです。

婚姻は聖なる秘跡です。主イエズスのみ名において洗礼の秘跡にあずかった人々が、またそのみ名のもとで婚姻の秘跡にあずかります。二人の愛は神の愛にあずかる愛であって、神は二人の愛の源です。今日新たにされ祝福された信者同志の結婚は、神の秘義の地上における象徴であると同時に、愛あふれ命を与える唯一の神における三つのペルソナの共同体の象徴であり、またキリストのうちに教会と結ぶ神の契約の象徴でもあるのです。

キリスト信者の結婚は救いの秘跡です。そしてそれは、家族にとって聖化へのかけ橋になります。あなたがたの家庭が祈りの中心になりますように。家族が神の現存のうちに憩える家、歓待と祈りと神への讃美を共にするために人々が招かれる家でありますように。「心の底から、恩寵によって詩の歌と讃美の歌と霊の歌をもって神を寿げ。あなたたちが言葉と行ないをもってすることはすべて、キリストによって、父なる神に感謝しつつ、主イエズスのみ名によって行なえ。」(コロサイ3・16～17)

この国にはカトリック信者とその他のキリスト信者との結婚もかなりあります。時に、この人たちは特別の困難を経験することでしょう。このような家族の方々にお話します。あなたがたは、キリスト教一致へ向かう希望と困難を結婚生活の中で体験することになります。共にする祈りと、愛における一致の中にその希望を表わしてください。愛である聖霊を心の中に、そして家庭の中に共に招いてください。そうすれば聖霊は互いに信頼と理解を深めるよう助けてくださることでしょう。

兄弟姉妹のみなさん「心をキリストの平和に司どらせよ。(…)　キリストのみ言葉をあなたたちの中に豊かに住まわせよ。」(コロサイ3・15～16)

最近私は、現代におけるキリスト信者の家庭がになう役割に関して、全カトリック教会に教皇訓戒を書き送りました。その中に今日の家庭生活のもつ肯定的局面をいくつか挙げました。たとえば、結婚における個人の自由に対する認識、夫と妻、親と子等の対人関係の本質に対する配慮、婦人の地位の向上に対する配慮、責任ある出産や子供の教育に対する配慮など。しかし、同時に否定的現象にも注意を向けざるを得ませんでした。自由についての堕落した考え方と経験、その結果としての人間関係における自己中心主義、親子の関係に対する誤った考え、増加する離婚、堕胎、避妊、さらに生命を否定する傾向などです。こういった破壊的勢力に加え、社会的経済的情勢も、結婚と家庭生活の強さと安定性をぐらつかせ、多くの人々に影響を与えています。また「不適合」とか「時代遅れ」のものとして結婚生活を攻撃する人々による、家庭に対する文化的猛襲もあります。こういったことすべては、社会と教会に対する重大な挑戦です。私はこう書き記しました。「歴史は単によりよいものに向かう安定した進歩ではなく、むしろ自由な行動の結果であり、まさに互いに対立する自由の争いである」と。(『家庭について』6番)

キリスト教の結婚観と家庭観を支える希望や理念についてお話しましょう。子供への愛の中に、結婚の誓いに忠実であるための力を見い出すことができます。この愛がどのような嵐や誘惑に遭っても、しっかりと立っている岩のようでありますように。聖パウロがコロサイ人のために願った祝福以上の願いはありません。「深い慈悲、情け、謙遜、柔和、寛容をまとえ。互いに忍び、他人に不平があっても赦し合え。主が赦されたように、あなたたちもそうせよ。だが何よりもまず愛をまとえ。」(コロサイ3・12～14)

親であることには、喜びや満足だけでなく、心配や困難も伴います。子供は宝です。時としてうまく表現できないながらも、子供たちはあなたがたをとても愛しているのです。独立を求め、なかなか従順であろうとはしません。時には過去の習慣や信仰さえ拒絶しがちです。

家庭では、橋は取り除かれるのではなく、架けられているべきです。さまざまな経験を積み、探究を繰り返しながら、知恵を得、真実なるものを見い出していきます。あなたがたの働きは教会にとって真の助けとなるものです。家と心の扉を家族すべてに開いていてください。

うまくいかなかった結婚もあるという事実

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

を見過ごすことはできないとしても、すべての夫婦の愛に対する神の真のご計画を宣言し、そのご計画に忠誠であれと主張することは、天の王国の完全な生命へ向かって進みゆく私たちの義務なのです。しっかりと覚えておいてください。神の民に向けられた神の愛、教会に対するキリストの愛は、永遠であって、決して壊れることはありません。信者としての婚姻によって結ばれた男女の契約は、この神の愛とおなじく、解消できないもの、もとにもどせないものなのです。(『聖座公報』一九七九年、1224頁参照)　この真理は世界中にとって大いなる慰めとなります。失敗した結婚もありますから、教会も私たちも、ことさらに声高くこの真理を忠実に宣言する必要があるのです。

結婚において試練と痛みと苦悩を知った人人の近くにキリストはおられます。寛容と慈悲の源であるキリストご自身がおられるのです。いつの時代でも、数多くの夫婦が、時には大変難しいことではあったのですが、キリストの十字架とご復活の秘義から、結婚の不解消性の証人となる力を得てきました。神の掟を誠実に守り、神の掟の証人となるための努力は、人間の弱さにもかかわらず、無駄ではありませんでした。この努力は神の恩寵に助けられて、まず私たちを愛し、みずからをお与えになった神に対する、私たち人間の答なのです。

教皇訓戒の中で説明したように、教会はどのような困難な事柄においても、牧者として家族の世話に全力をつくしています。結婚の失敗で傷みを知った人々、一人で家族を育てていく上で孤独を味わった人々、家族生活の中で悲劇に訪れられたり、精神あるいは肉体の病気で苦しんでいる人々に、私たちはキリストの愛をもって援助の手を差し伸べなければなりません。結婚の失敗で傷ついた人々にキリストの哀れみを示し、キリストの真理に従って勧めを与える方々をたたえたいと思います。

当局の方々、そしてすべての善意ある人々に申しあげたい、家族を宝とし、家族の権利を守ってください。あなたがたの法律と行政で家族を援助してください。家族の声がみなさん方の政策に反映されますように。社会の未来も人類の未来も家庭を通って進んでいきます。

結婚の誓いを今新たにされる兄弟姉妹のみなさん、誓いの言葉が心からのものであり、家族の中に真実の愛を生み出すものでありますように。そして、家庭がまことの愛の共同体でありますように。その愛を遠くの人にも近くの人にもひろげてください。とくに近所の孤独な人、貧しい人、社会から取りのこされた人々に。そうすれば平和な社会を建設することができるでしょう。平和を保つには信頼が必要です。信頼は愛の子供です。そして、愛は家庭という揺りかごの中でこそ生まれるものなのです。

叙階

司祭職を志す兄弟のみなさん、キリストは今日、御父に対する祈りを新たにされました。「彼らを真理において聖別してください。あなたのみ言葉は真理であります。」(ヨハネ17・17)　聖別されて、あなたがたは更に「新たな被造物」となります。この世から離脱し、完全に神に献身する者になるのです。そしてキリストの特使としてこの世を神と和睦させるという使命を受けます。イエズスが御父から送られ、聖母マリアからお生まれになったのは、この目的、つまりこの世と神との和睦という目的のためでした。そしてまたキリストが弟子たちにゆだねられたのもこれと同じ使命でした。「あなたが私をこの世に送られたように、私も彼らを世に送ります。そして私は彼らを真理によって聖別するために、彼らのために自ら犠牲にのぼります。」(ヨハネ17・18)

人生における重大な瞬間にいらっしゃるみなさん、ご自身が聖別されたように、あなたがたも聖別されることをどんなにイエズスがお望みであるかを知ってください。司祭職という絆があなたがたとキリストをいかに強く結びつけるかを悟ってください。神の民に神の愛の賜物を運び、神の民の祈りあふれた答を神に捧げるというあなたがたの特権にふさわしい生き方をしてください。

神の人、神の親しい友でなければなりません。毎日の決まった祈りを豊かなものにし、告解をきちんと定まった日課の一部としてください。なぜなら、あなたがたの司祭職における力は、人的資源にではなく、主の中にこそ見い出されるということをより深く理解させてくれるのは、なによりも祈りと告解だからです。

キリストとの友情を毎日深めていってください。みなさんの世話に委ねられた人々の希望と喜び、悲しみと失望を分かち合うことを学んでください。キリストの救いのメッセージ、和睦を人々にもたらしてください。教区の人々を訪問してあげてください。英国ではこれが教会の支えになってきました。決しておろそかにはできない司祭としての仕事です。神の忠実な愛について勇気をもって語ってください。あなたがたをとくに必要としている人々、刑務所にいる人々やその家族などを忘れてはなりません。福音の中でキリストはご自身を囚人として記しておられます。「私が牢獄にいるとき、あなたが訪問してくれた」と。彼らに罪があるかないかは述べておられません。だれ一人として、キリストの代理者である司祭の愛から除外されることはないのです。みなさん方にお願いします。英国の全刑務所、とくにマンチェスターの刑務所に私の挨拶を届けてください。イエズス・キリストは良心の平和とすべての罪の赦しを与えに行かれました。イエズス・キリストを通して彼らに希望を与えてください。みなさん方を通して、心の内において、イエズス・キリストはそういう人を愛することをお望みです。そういう人のためにキリストは死去されたのです。神の忠実な愛を信じていることが、みなさんの忠実な生き方にあらわれますように。生き方の模範で福音を宣言しなければなりません。人々の一生の決定的瞬間に秘跡を授ける時、人々がキリストの約束された恵みと慈しみを心から信頼することができるよう助けてあげてください。みなさんがご聖体の犠牲、救いの犠牲をささげるとき、人々はこの偉大な神の愛をうけるだけでなく、受けた愛を愛徳のおこないに変えねばならないことを理解できるよう助けてあげてください。

兄弟のみなさん、みなさんの生き方を見て人々がどのような影響を受けるか、よく考えてください。みなさんの叙階は、長い年月を司祭職に捧げてこられ、今日ここに列席されている大勢の司祭の方々にとって慰めの源です。この方々の働きに主は感謝しておられます。司祭の方々を祝福し、これからもずっと教会に司祭を送り続けることを保証してくださいます。この司祭方が、召し出しを受けた頃の喜びに満ちた熱心さで心を新たにし、この世と神との和睦というキリストの司祭職に労をおしまず自己を与え続けられますように。

高齢のため、また病気のためにここに来られなかった司祭も大勢おられます。キリスト・イエズスのうちに私の愛を送りたいと思います。そのような司祭方の祈り、知恵、苦しみは教会にとってかけがえのない宝です。それらは豊かな祝福のみなもとになることでしょう。

みなさん方と同年輩の人々のことを考えてみましょう。主が自分に何をお望みなのかをまだ確信できないでいる人々にとって、みな

さんが迷うことなくキリストの使命を受け入れたことは、明白な証となることでしょう。神に仕えるために叙階の秘跡を受けるということは、信仰と勇気と自己犠牲を要求する神の崇高な召し出しであることを人々に示してください。きっと英国の若者の中にも、信仰と勇気と自己放棄の生活に向かう人々を見つけることができるでしょう。そのような若者に申しあげたい。みなさんの中にも司祭職や修道生活に召された人がおられるはずです。

主の呼びかけに耳を傾け、司祭職や修道生活にはいるなら、必ずそこに大きな喜びと幸福を見い出すことができるでしょう。「私のくびきは快く、私の荷は軽い。」(マテオ11・30)

最後に、これから叙階の秘跡にあずかる人たちのご両親とご家族の方々に挨拶を送ります。教会の名において、私と同じ司教方と共にみなさん方の寛大さに感謝いたします。この人々を世に送り出したのはみなさん方です。信仰と、理想、教育、自由などを与え、きょう神の祭壇へと導いたのはみなさんです。教会は、神からいただいたそれぞれの賜物を互いに分かち合い助け合う家族、司教、司祭、助祭、修道者、信者の集いでなければなりません。小教区の信仰と才能はすべての司祭が頼りとするものです。神の恩寵の分配者となる喜びばかりでなく、小教区の人々を通して自分も豊かに恩寵を受ける喜びを知ることでしょう。司祭と人々の協力は互いの祈りと尊敬と愛の上に成り立ちます。それがこの国の伝統ですが、今後も受け継がれ、決して失われることがありませんように。

叙階の秘跡によって主は真の「新しい創造」の業を続けられます。全世界にメッセージを送られ、司祭職への召し出しを受ける人ひとりひとりに語り続けてくださいます。「私がつかわすところに行き、私の命じることを、告げよ。彼らの前で恐れるな。私が、あなたを自由にするために、あなたとともにいる。——主のお告げ——。」(イエレミア1・7～8)

私は、至聖なる三位一体の誉れのため、カトリックの信仰を称え、キリスト者の生活を固めるために、多くの司教の助けを求め、熟考の末、主イエズス・キリスト、及び、使徒聖ペトロと聖パウロ、さらに私に与えられた権限にもとづき、福者マキシミリアノ・マリア・コルベを聖人として公けに宣言します。彼の名を聖人の名簿に記し、全教会でマキシミリアノ・マリア・コルベを殉教者として、崇めることを確認いたします。(列聖宣言文)

「友人のために命を与える以上の大きな愛はない。」(ヨハネ15・13)

教会は本日より、救い主の右のことばを文字通り実行したマキシミリアノ・マリア・コルベ神父を、聖人と称することになりました。一九四一年七月の下旬に、収容所長の命により、飢死する運命を与えられた人々が列を作ってならんだとき、そこに居る人々のうちの一人のかわりに死ぬ用意があると自発的に申し出たのがコルベ神父であったのです。申し出は受け入れられました。そして、飢餓のために苦しみの二週間を過ごしたあと、八月十四日、致死注射をうけて死去しました。アウシュビッツの収容所でのできごとでした。

神父のおかげで命びろいをした人は、家族もちであり、家族にとってはどうしても必要な存在でしたから、死ぬ覚悟のあることを示すことによって、神父は生存権を擁護したことになります。神父は、罪なき命の支配権がひとえに創造主にあることを厳として主張し、キリストと愛の証人となったのです。使徒聖ヨハネが書いているように、「主が私たちのために命をささげられたことによって、私たちは愛を知った。あなたたちもまた兄弟のために命をささげなければならない。」(ヨハネ3・16)からです。(…)

「主に忠実なものの死はそのみ前に尊い。」(詩篇116・15)　答唱詩篇として以上のことばをくりかえしたところですが、測り知れないほど美しい詩篇です。十字架上の死によって、キリストは世の救いを実現してくださいました。死は最高の愛のあらわれです。コルベ神父の死によって、罪と死に幾重にもしばられた今世紀に、(…)愛のしるしが輝いたのです。

人のうちになされた神の偉大なみわざをたたえましょう。ここに集う私たちの前で、コルベ神父は「救いの杯」をかかげています。「兄弟のための」殉教によって閉じられた、全生涯にわたる犠牲のふくまれた杯をかかげているのです。

コルベ神父はポーランドで過ごした幼年時代からキリストに従い、やがて訪れる決定的な犠牲のために準備をしていました。その頃から神秘的なこの冠の夢を見ていました。それは赤い冠と白い冠の夢ですが、コルベ神父はいずれかを選ぶのではなく、両方共を受け入れたのです。事実、幼年時代からキリストへの大きな愛にみたされ、殉教を夢にみていたのでした。

愛の殉教者　聖コルベ

霊感のみなもと、無原罪の聖母

コルベ神父の生涯を導いたのは無原罪の聖母でした。キリストへの愛と殉教の望みを無原罪の聖母に託していたのです。無原罪の秘義のうちに、神の恩寵という超自然のすばらしい世界を見ていました。神父の信仰とわざをふりかえると、無原罪の御宿りの旗印のもと兵士として仕えることこそ、神の恩寵に協力する道であると考えていたことがわかります。コルベ神父の一生にはマリア的というべき点が顕著にみられます。祖国においても布教国においても、神父の使徒職にはつねにマリアという印が深く刻まれてありました。

一九四一年八月十四日のアウシュビッツに何が起こったのでしょうか。

本日の典礼が答えてくれています。「神は試みをお与えにな」り、「ご自分にふさわしいものとされた。」(知恵の書3・15参照)　神は「炉に入れる黄金のように」コルベ神父を「お試しになった」のです。(同3・16)

「人間の目の前で、罰せられたかのように見え」ましたが、「不滅のものに希望をかけ」ました。「正しい人の霊魂は神のみ手にあり、どんな苦しみもそれに触れえない」からです。人間的にみて、苦しみと死がやってくるかにみえるとき、「人々の目にとって、死んだようにみえるとき」、「彼らが去っていったのは亡びのようにみえるとき」、——そのようなとき、彼らは平和のうちにおり、「神のみ手のなかで」命と栄光を受けるのです。(知恵3・1～4参照)

ここでいう命こそ、キリストの死と同じ死の結果であり、栄光とはキリストの復活にあずかることを言っているのです。

人々の目にとって、共に苦しむ仲間が「死んだ」ように見え、人間的には「去ったのがわざわいにみえても」、心の中では単なる「死」ではありません。コルベ神父は死去したのではなく、「友人のために命を与えた」のです。

不変の教え

幼児洗礼に関する訓令

洗礼と子供の自由

ある人々は、新約聖書の中では、洗礼は福音宣教に続いて行われ、回心を前提とし、信仰宣言をともなうということ、さらに恩恵の効果(…)は、一般的に言って、秘跡よりもむしろ信仰と結ばれているということを指摘して、順序としては「宣教、信仰、秘跡」というふうに定めるべきであると提案する。(…)

使徒たちの宣教が、通常成人に向けられていたこと、そして最初に洗礼を授けられるべきだったのは、キリスト教の信仰に回心した人たちだったということは疑いない。(…)しかしながら、上述したように、子供の洗礼の実施は使徒たちに起源を有する大昔からの伝統であり、その重要性は無視することができない。そのほか、洗礼は信仰なしには決して授けられない。ところで、幼児の場合には、教会の信仰がそこにある。

さらに、秘跡に関するトリエント公会議の教えによると、洗礼はただ信仰のしるしであるばかりでなく、信仰の原因でもある。洗礼は受洗者に「内的照らし」をもたらす。それでビザンチン典礼では、洗礼を照らしの秘跡または単に照らしと呼んでいるが、それは正しい。というのは、受洗者が受けた信仰は、その人の魂に滲透し、キリストの輝きによって盲目の蔽いを取り払ってくれるからである。

ある人は、幼児に洗礼を授けることは、自由の束縛であるといって反対する。彼らは言う。あとで拒絶するようになるかもしれない将来の宗教上の義務を子供たちに負わせることは、人格としての彼らの品位に反する。むしろ、子供たちが自由に自分で責任を取れる年齢に達したとき、はじめて秘跡を授ける方がよい。それまでは、両親や先生は自己を抑制して、子供たちにいかなる圧力もかけないようにすべきである。

このような態度は単なる幻想に過ぎない。というのは、いかなるものにも影響されない、純然たる人間的な自由というものはないからである。自然的な生活レベルにおいてさえも、両親は子供の生活のため、また真に価値あるものへの方向づけのために最も大切なことを子供のために選択する。家庭のほうで、子供の宗教生活に関して、いわゆる中立的態度を取ることは、実際には、否定的選択をするということになり、最も大切な善を子供から奪ってしまうことになるであろう。

とりわけ、洗礼の秘跡は子供の自由を危険にさらすと主張する人は、次のことを忘れている。すなわち、各個人は、洗礼を受けていても、いなくても、みな被造物としてどうすることもできない義務によって神と結ばれ、洗礼はその義務を批准し、神の子としての養子縁組によってそれを尊くするものであるということを。また新約聖書の教えによると、キリスト者の生活にはいることは、奴隷または圧迫された生活をすることではなく、真の自由へ受け入れられることであるということを、彼らは忘れている。

子供が成長すると、洗礼によって生じた義務を放棄してしまうことも起こりえる。そのために両親は傷つくかもしれないが、子供に洗礼を授けて、キリスト者として養育してきたことについて自分をとがめる必要はない。そうすることが彼らの権利であり、義務であったからである。たとえ外見的にはそうであっても、子供の魂に蒔かれた信仰の種は、いつかまた生命をとりもどすかもしれないし、両親はまたそのために、忍耐と愛、祈りと自分自身の信仰の証しによって寄与することができる。

(『幼児洗礼に関する訓令』　一九八〇・十・二〇より)

アンジェルス・メッセージ

ご託身に感謝

1「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出るすべてのことばによって生きる。」(マテオ4・4)　教会は、典礼のなかで、誘惑を受けるキリストの口からでた、この言葉を黙想せよ、と言います。この前の機会には、創造のみわざに関わり、からだを維持するために不可欠であるパンについて、感謝の心をあらわしました。本日は、神の口から出るおことばに感謝したいと思います。神の口から出る言葉は、真理のことばであり、真理は、霊魂にとって、欠くことができないからです。

「神は、何度も、いろいろな方法で、(…)預言者を通じて、先祖に語られたが、このおわりの日々には、(…)御子を通じて語られた。」(ヘブライ1・1)私たちは、このようにして語られた、神のおことばに感謝をささげます。

旧約聖書を通じて伝えられたおことば、さらに福音書によって伝えられたおことばに、感謝いたします。

2お告げの祈りを唱えるたびに、「みことばは肉体となって、私たちのうちに住まわれた」ことを思い起こします。

みことばとは、御父と同一の本性を有する神人であります。「はじめにみことばがあった。みことばは神とともにあった。みことばは神であった。」(ヨハネ1・1)

お告げの祈りを唱える毎に、みことばのご託身を思いだし、本当にありがたく思います。

「肉体となったみことば」、神人イエズス・キリストがおおせになるのです。「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出るすべての言葉によって生きる」と。(マテオ4・4)

託身されたみことばとは、右の言葉の、最高にふさわしい与え主です。人間とその霊魂はその言葉によって生きています。それらの言葉は「神の口から出る」からです。実に、託身されたみことばは、永遠の生命のことばを寛大に与える御方です。

3神の御子の口から出た永遠のことばのうち、いのちのパンについての言葉には特に深い意味があるはずです。キリストは「命のパンとは私のことだ。私に来る者はもう飢えることがなく、私を信じる者は、いつまでも渇きを知らないだろう」(ヨハネ6・35)とおおせになりました。

だから、「人はパンだけで生きるのではない」い、つまり物質的なパンだけで生きるのではありません。

「神の口から出ることば」の力、つまり、キリストご自身、託身され、パンとなったみことば、霊魂の糧、永遠のいのちのパン、によって生きるのです。キリストはさらにおっしゃいました。「私の父が、天からのまことのパンをあなたたちに下さるのだ。神のパンは、天から下って、世に命を与えるものである。」(ヨハネ6・33)

とにかく、人は物質的なパンだけで生きるのではありません。神の言葉はぜひ必要です。そして、その言葉の力で、キリストの御体となった、永遠の命のパンを欠かすことはできないのです。

4ご聖体の祭儀では、二つの食卓が準備されます。神のおことばという食卓と、主キリストの御体と御血という食卓。すべての人がふさわしい準備をして、この二つの食卓にあずかり、永遠の命の糧を得ることができるよう、お祈りしましょう。ご聖体を中心にした生き方が、私たち一人ひとり、そして、教会全体のなかで、一層成長し、より深められますように。

(一九八二・八・一)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393